

エリアスタディの現状と課題

高 谷 好 一*

Present and Future of Area Studies

Yoshikazu TAKAYA*

目 次

- | | |
|---------------|------------------|
| I. エリアスタディの定義 | 1. 地域単位をどう設定するのか |
| 1. 過去のエリアスタディ | 2. 何を見据えるのか |
| 2. ジレンマから抜け出す | III. 最近の前進のひとつ |
| II. 課題 | |

この小論では最初にエリアスタディが戦後、日本でどのように展開してきて、現在どのような状況にあるのかを概観する。そして、それを踏まえて、今、私達が行っているエリアスタディはどんな問題、とりわけどういった方法論上の問題を持っているかを述べてみる。

I. エリアスタディの定義

エリアスタディとはどんな学問なのか、何を狙うのか、ということに対する最終的な答えはまだ得られていない。しかし、ごく最近になって、その方向が少しばかり見え出してきたかのようにも見える。エリアスタディの辿ってきた道を概述して、その上で今日の状況を見てみよう。

1. 過去のエリアスタディ

エリアスタディという言葉が盛んに使われ出すようになるのは1950年代の後半になってからである。エリアスタディが最も脚光を浴びるのはアメリカがヴェトナムに深くかかわるようになってからである。ヴェトナムを中心に広く東南アジアの状況を知るために、い

*滋賀県立大学人間文化学部 ; School of Human Cultures, The University of Shiga Prefecture

ろいろの分野の研究者が動員され、地域把握のための、いわゆる学際的研究というのが行われた。これが第二次世界大戦後まもなくのエリアスタディであった。この種の地域の研究は実はもっと以前から行われていた。欧米諸国は植民地経営を能率的に行うために行っていたのである。この意味ではエリアスタディは実質的には19世紀に始まっているといってもよい。

第二次世界大戦後の日本のエリアスタディは1960年代に入ってからこれら欧米のものとは全く別のものとして始まった。エリアスタディという言葉自体もあまり一般的にはならず、もっぱら地域研究という言葉が用いられた。とはいえこの研究が始められることになった背景には、やはりアメリカにおけるエリアスタディの興隆があったことには間違いがない。エリアスタディの学際的な方法論は社会科学の分野に新風を吹き込みつつあった。それを見習おうというのが、最も大きな動機であった。ただ地域研究はエリアスタディとは大きく違う点を持っていた。それは地域研究が全くの純学問的なものであり、政府の政策などからは完全に独立したものであったことである。

京都大学は日本における地域研究の中心的存在として研究を開始したが、その進め方は次のようなものであった。すなわち、戦前、人文科学研究所を中心に行われていた支那学の伝統を生かし、それをより現代的な問題にまで延長する、ということであった。さらに地域のより深い理解のために自然科学分野の研究者を加えるということであった。こうして始められた日本の地域研究は世界的に見て極めて顕著な二つの特徴を持つことになった。第一は自然科学の専門家が参画していたということである。第二は、政治的には全くのノンポリで、極楽トンボな研究であったということである。

1960年代中頃から本格的に動き出した京都大学における地域研究はこうして歴史学者、言語学者、文化人類学者、社会学者、生態学者、農学者等々からなっていた。ちなみに、私も1966年にこのグループに参加したが、私自身の専門は地質学であった。

京都大学の場合、研究対象には最初から二つの所が選ばれた。タイとマレーシアである。研究者はどちらかの班に属して、他の専門の人達と一緒に現地調査と研究会を重ねた。二つの班で狙っていたことは、これらの地域がどのような生態の上にどのような文化と社会を生み、それはどのような歴史的変遷を経て今に到ったかを明らかにすることであった。要するに、一つの地域を学際的、総合的に捉えるということであった。

ところで、この学際的ということに関しては極めてしばしば議論になったことがある。それは学際とは複数の研究者の共同で行うということなのか、それとも一人の研究者の中で多分野を融合させるということなのか、ということであった。

2. ジレンマから抜け出す

学際は複数でやるものなのか一人でやるものなのかという議論は今でもまだ決着はしていない。現状からいうと、半数以上の研究者はそれは複数で行うべきものだと考えているとあってよい。各研究者が自分の本来の専門を堅持しながらも、それよりは少し広く守備する。こういう研究者が複数集まると、お互いに隣同士で重なった部分ができるから、結果的には全てが覆いつくせ、対象の総合的把握は可能になる、と考えるのである。だが一部の研究者は、それでは本当のところは掴めないし、またチャレンジングでもない、として一人での総合化を狙って研究を進めた。

こうした状況のなかで、そのうちだんだんと別の問題があらわになってきた。それは後者の場合に典型的に現れたものなのだが前者の場合も同じようなことがいえた。私は自分では後者に属していたと自負するのだが、その自分の例を取り上げて、その様子を述べてみよう。

すでに述べたように、私自身は地質学を勉強していた。特に第四紀地質学を専攻していたから、タイ研究班に加わったとき、チャオプラヤ・デルタの地形発達史をテーマとして選び、チャオプラヤ川の崖の露頭を記載してまわった。しかし、私は常に一種の強迫観念に悩まされていた。第四紀地質学では地域研究にならないのではないかと、という強迫観念である。そんなとき、私は幸運にも指導者を得て、土壌学の方に手を上げた。それ以後も近くにいた水文学者、農学者などの研究者から教わるが多かった。こうして、私は比較的多くのテーマをこなすことになった。もちろん広く、浅くである。

そのうちに私は稲作そのものにも興味を持つようになった。そして稲作にもいろいろの類型があるのだ、ということをつくづく感ずるようになった。それらは皆、その生態的条件に縛られてそうになっているのだ、というようなことを考えるようになり、それを整理して発表した。「水田の景観学的分類試案」と題して書いた小論がその頃のものである。

私はタイ班に属していた。タイ班は歴史学者と人類学者による村落調査を基軸において研究を進めていたから、そのうち、私はこうした人文系の人達からの影響も強く受けるようになった。こうして私は自分が案出した稲作景観を用いて、タイの稲作発展史を論ずるようになった。1982年に発表した『熱帯デルタの農業発展—メナム・デルタの研究—』（創文社）はその成果である。

その頃、私はいささかの満足をしていた。稲作景観などという概念は普通の学問分野では取り上げられないような漠としたものである。漠としていることに私は満足していたのである。生態学からも農学からも社会学からも歴史学からも、こんな複合的概念は出て来ないだろうと、悦に入っていたのである。そして、私はこの研究の手法を景観学的手法と

名付けたりしていた。

しかし、やがて私ははたと気がついて愕然としたのである。自分のやっていることと文化人類学者のやっていることとは本質的な所でどこが違っているのだろうか、あまり違わないではないか。私は稲作地帯をくまなく歩き回り、ああでもない、こうでもないと呼吟し、時にはハッとひらめくことがあったりすると、それを大事にし、そんなことを繰り返しながら、とにかく、稲作地帯の実態というものを把握しようとしてきた。それは文化人類学者が一つの集落のなかでやっていることと結局は本質的には同じではないのか。こちらは稲作地帯という、少しは広い範囲を対象にしている。それに対して、向こうは一集落というやや狭いところを対象にしている。だが、やっている基本は同じだ。そんなことに思い到り今度は一気に、不機嫌になり、何とかしなければという焦燥に悩まされることになった。この状態はかなり長く続いた。

そんなある時、私は全く新しい学友と出遭うことになった。政治学者の矢野 暢である。同氏との付き合いはそれよりずっと前からあったが、学問的な接触は少なかった。その矢野 暢が、ある日景観学的手法は素晴らしい、といい出したのである。オーバーな表現をする同氏は、この手法は行き詰まっている社会科学に突破口を開けるものである、などといった。私は同氏のいう意味が長い間判らなかつた。しかし、同氏は何回も何回も言葉をかえてはそのことを言い続けた。「今の世界はこのまま行けば崩壊する。崩壊を免れようとすれば、パラダイム・シフトが必要である。」「21世紀には政治学や経済学に替わって何か新しい学問が出て来なければならない。それが何であるかは、まだ誰も知らない。自分にも判らないのだが、生態学ではないかという予感がする。」「生態を基礎にした秩序が求められることになるのではないかと思う。」「生態といっても人間抜き生態ではない。人間が加わった景観とでもいったものだ。」等々と私を教育するのである。「そういうことから、景観学的手法というのは、ポスト・モダンの新秩序を考えるときに極めて有効な手段になりうると思う。がんばれ！」というのであった。

矢野 暢はこの言葉を二年間ぐらい言い続けたのではないかと思う。馬の耳しか持たなかつた私だったが、ある日忽然とその意味が判り、目から鱗が落ちたような気がした。「そうだ、地域研究とはポスト・モダンの世界秩序を考える学問だ、そのところが文化人類学とは全く違う！」そのように私は考えることになったのである。

この考えを共有する人達はまだ少数だが、何人かいる。地域研究は少しずつそちらの方を向いて進み出した。

II. 課題

1. 地域単位をどう設定するのか

地域研究では世界システムの考え方は否定されている。世界システムの考え方とは典型的にはウォーラスティンらがいうように、世界には一つの中心があり、それをとりまいて中間帯、周辺からなっているという考え方である。この単質な球体の数学モデルにも似た世界認識の方法は地域研究者の間では最初から否定されている。現実には、地球表面には砂漠や草原や森林、それに熱帯や寒帯といった、いろいろの生態があり、それに応じて、いろいろと性格を異にする社会が、いわばモザイク状に分布している。これらの生態的、文化的、社会的多様性を全て無視して、経済だけを取り上げて、数学モデルを作り上げるのは全く片寄った考え方であるからである。仮に、今日の世界がそういう傾向を持って進んでいるのだとしても、それなら、それは正さなければならぬのである。近代資本主義のこのシステム論こそが地球を破滅へ押し進めている元凶であるからである。

こうして地球は多様なものの寄せ集めであると考えられるわけだが、その多様なものはどのような分布をしているのだろうか。それらを記述し、分析するためには、それらの一つひとつの分布域を決定することがまず必要になってくる。これが地域研究のまず、最初の作業になるのである。ところがこれがなかなか一筋縄ではいかない。

ポスト・モダンの秩序ということになるとどういうことを考えなければならないのであろうか。私が考えるのものはこういうことである。地球上にはいろいろの生態がある。それと同じように、いろいろの価値観を持った人達がいる。何を幸福と考えるかということをとって見たとしても、場所によって随分違う。ある地方の人達は自分が金持ちになり安楽な生活を送ることを最大の幸福と考えている。しかし、別の場所では子供が幸福になることを自分の最大の幸福と考える。違った所では違ったことを大事だと考えているのである。地球上の人間が共存していくための秩序を考えようということになると、まず最初に必要になってくることは、どの範囲の人達がどういう価値観、世界観を共有しているのか、それを知ることである。まず同一価値観を共有している人達の住む範囲を確定することである。あるいはこれは次のようにいってもよい。住民がそこに帰属意識を持っている範囲、それを確定することである。

ところが、これが大変難しい。価値観や世界観を基準にした地域区分ということになると現在の国境はしばしば役に立たない。世界の多くの国境、とりわけ旧植民地から独立した国々の国境は、土地の人達の価値観などというものとはおよそ関係がない。たいていの国境は大戦前に列強が領土の奪い合いをし、その結果、彼等の都合によって引かれたもの

である。しばしば同一民族を分断したり、逆に極めて不自然な合併を強行したりしている。この種の不合理な国境線の典型的なものはアフリカに見られる。あの定規で引いたような直線状の国境がそれである。

新しい秩序を考えるとすれば、だから、最初にその範囲から考え直した方がよい。人々が価値観を共有する範囲、人々がそこに帰属意識を持つような範囲、それをポスト・モダンの世界秩序の地域単位とすることが最も好ましい。こういう範囲が見出せると仮定して、私はそれを「世界単位」と名付けたのである。

「世界単位」とは別のいい方をすれば、socio-cultural-eco-dynamic に作りあげられたもので、長期にわたって安定的に存在している地理学的範囲ということである。あるいはこれはまた次のようにいってもよい。一つの生態の上にはそれに応じた生業（広くは文化）、社会ができる可能性が大きい。時に、そうした社会は他の社会との接触で変化したり、あるいは時には複数のものが合体してより大きな、新しい社会を広げることもあり得る。そうしたことを歴史のなかで繰り返してきて、結果的には同一の価値観を共有する地域というようなものが今日のような恰好でできているのである。だからそれを、何らかの方法で見つけだして、それを多様な地域群の単位にしようというものである。国境などという部外者の暴力で引かれた線は横に置いて、人類史的にみて、より意味のある、境界線を見いだしてみようということなのである。

このことは、理論的には正しいことなのだが、いざやってみようとするとは至難の技である。価値観などというものはそう簡単に発見できるものではない。直接、住民に出あって、あなたはどこに帰属意識を持つのですか、と聞いてみてもいい答えは得られない。普通、私達はいくつもの所に帰属意識を持っているのである。親族集団にも、同一言語グループにも、又、いわゆる国家にもそれぞれにながしかの帰属意識を持っている。質問者は、そのうちで最も大事なものを聞き出したいのだが、そんなものは通り一遍な質問に対しては誰も答えてくれない。第一、普通の人は常日頃そんなことは意識的に考えたことがないから答えられないのである。

一方生態、生業、文化、社会といった風に分けていって、それを積み上げ地域を括り出すという、いわゆる科学的方法も必ずしもうまくいかない。実際、この方法はまず間違いなく失敗する。土壌図や植生図や生業分布図や言語分布図等々といった主題地図はいくつも出来ていくのだが、それらの全てが似たような境界線を示してくれるようなことはまずない。無理をして重ね合わせてみると、何を表す地域になっているのか判らないようなことになる。

現実の問題として、地域の境界を決めるということは、一種の勘に頼って決めているこ

とが多い。実際に歩きまわって、いろいろのものを見、住民と会話を交わしたりしてかなり豊富な現場の実情を知っておく。その一方で、主題地図的なものを組み立ててはこわし、また組み立ててみる。そうしたことを繰り返す中から、何となく境界線はここだ、といったものが浮かび上がってくる。今のところ、境界線を得る最も確実な方法はこのようなものだとししかいいようがない。

このところは、別の角度からいえばこういうことである。このあたりだと狙いを定めた地域の周辺だけに目を向けていても本当はうまくいかない。それがもし狭い範囲だと、その地域をいくら繰り返して歩いてみてもその輪郭というものは浮かび上がってこない。むしろ、かなり広く歩きまわっている間に、境界が浮かび上がってくる。ここと、あそことは違う、ということが見えてくる。それぞれの地域の正確な内容はまだ掴めていなくとも、その違いは感じられる、といったことがよくある。するとそこに境界を引くのである。現実にはフィールド調査でこの種の違いを見出し、それをもとにしてその上に主題地図を重ねてみて、そのうえで境界線を決定するというのが最も確実でかつ手っとり早い方法である。

こうして境界線は決定できる。隣接する二つのものの中で引いたわけで、これでよいはずである。だが、実際にはまだ不安が残っている。理由はこういうことである。こうして括り出した一つの範囲ははたして適正なサイズかどうか判らないからである。他と比べて特別小さい範囲や特別大きい範囲となっていると、せつかく括り出した地域の意味が半減してしまう。後には他地域と比較するという作業も必要になるのだから括り出す地域区分のレベルには注意しておく必要があるのである。こんなことを考えると、たとえ一つの地域の輪郭を決めるに際しても、その周辺の数個の地域をも同時に括り出し、それらとのバランスをとっておく必要があるのである。このことは、つきつめていうと、理想的には、地球全体を鳥瞰し、そこでのバランスを考えたいうで、一つの地域の輪郭を決めるべきである、ということになる。こういうことができる、これが一番よいということになるのである。

しかし、これは大変な作業である。一つの地域を括り出すのにも先に見たように膨大な作業を要する。主題地図を描き、さらには現地を踏査する必要があるのである。その作業を世界の全域で行ってはじめて線引きが可能なのだということになると、これはもう不可能ということになる。そんな中でとにかく線引きをし、対象とする範囲を決めねばならないのである。

2. 何を見据えるのか

地域研究の目的は住民が何を一番大事だと考えているかを見出すことである。地域が違ってくると、そこで人々が最も大事だと考えていることも違ったものになるだろうが、その住民の最大関心事、それをはっきりさせるということである。地域研究は最低の所でもそこまでは行かねばならない。もし可能ならば、さらにそうした違った価値観を持つ地域群の共存の方法を探ることである。

こういうことだから、仮に単位にすべき地域の輪郭が決定されたとき、その次にやるべきことはそれぞれの地域が持っている価値観、世界観の内容を明らかにすることである。その地域の基本的な性質、その地域が誇りに出来るようなユニークな特性を探り出すことである。

世界システムの論者などはこのあたりのところは実に簡単に考えている。どうせ人間というものは経済的に豊かになることを人生の最大の目的としているに違いない、だから経済だけを問題にすればよいのだ、と考えている。だが実際はそう簡単なことにはなっていない。確かに経済的に豊かになることは有り難いことだと考える風潮は世界的に広がっている。だが、その風潮を、ちょっと押しのけて見ると、その下には、各地域が持つ固有の価値観がある。いわば地域はそれぞれのたましいを持っているのである。それを掘り出すことが地域を描き出すということなのであり、それが今求められていることなのである。

しかし、この地域のたましいを掘り出すということは実際には極めて難しい。合理的・科学的な手法では不可能に近いのである。理由は合理的・科学的な方法というのは極めて片寄ったバイアスがかかっている、見えるものが限られているからである。この方法では合理的・科学的と見えるものしか拾いえないのである。例えば、ある集団が森にカミガミを認めているとしよう。そして、そのカミガミとの共存こそ最も大切なことと考えているとしよう。こうしたものは合理主義という立場に立つ時、完全に見落とされてしまう。また、仮にあったと判っても見捨ててしまわなければならないことにされてしまう。

そのプロセスは次のような具合である。科学者達は彼等のいう合理的思考ということで、森にカミガミが居るのかどうか実験で確かめてみようとする。電波探知機か何かを設置してみる。何も反応はない。次には森を切ってみる。森を伐れば住み家を追い出されたカミガミが見えるはずだという論理である。しかし現実には森を伐ってもカミガミなど現れない。そうすると、彼等は結局はカミガミなど居ないという断定を下す。そして、住民の考えていることは迷信だ、妄信だといって排斥する。

だが、これではいけない。この科学者達は基本的なところで間違っているのである。森にはやっぱりカミガミはいるのである。それは電波探知機には反応しなかった。けれども、

現実に森に入った人間の心には確実に反応している。要するに何かがあるのである。それから伐ってしまった後には何も残らなかったから、何もいなかったとする結論も間違っている。伐るまではちゃんとそこに居たのである。だが、伐ってしまうと途端に消滅してしまった。そんなようなものがそこにはいたのである。自分の片寄った思考の網にかからなかったから存在しないのだと結論し、自分には納得できないから妄想だ、妄信だと決めつける態度では、本当のものは見えてこないのである。

ポスト・モダンの秩序といえば、ポスト合理主義の秩序ということである。合理主義的思考だけでは見落とされてしまいそうなもの、そんなものにこそより大きな注意を向けて、地域の個性を探り出す。それが「世界単位」の思想なのである。しかし、これは、云うは易くして、行うは実に難しい。何故なら私達研究者は合理的思考をあまりにも徹底的に植えつけられてしまっているからである。

何を見据えたらよいのか、その見据えるべき対象が皆目見当のつかない所から、それを始めなければならない。しかも合理的思考を越えた、柔軟な姿勢でそれを行わなければならない。地域研究の方法論上の今ひとつの極めて大きな問題である。

III. 最近の前進のひとつ

最近、『総合的地域研究の手法確立』という文部省重点領域研究がスタートした。1995年度に始まった4ヵ年計画だがこれのおかげで地域研究は確かに一步前進した。この研究の副題は「世界と地域の共存のパラダイムを求めて」ということであるから、地域研究の狙い自体がすでに述べたように、はっきりしてきたのである。未来を見据える学問になってきたのである。これ自体が地域研究の大進歩である。少なくとも私はそのように考えている。方法論の面でもいくつかの前進があったとあってよい。地域研究はこういう形で少しずつ前進しているのである。

この重点領域研究の遂行中であつた、前進のうちの一例を紹介しておこう。こんなことがあつた。

私などは地域というものには固有の生態があり、その上にそれに応じた特別の生業が発展し、それを踏まえて独自の社会が出来るのだ、というような考えに始めの頃は強く固執していた。生態、生業、社会と積み上げていって、だから地域には固有性があるのだと主張していたのである。こういう考え方が基本にあり、今もそれを重視しているから、私などは「世界単位」などという概念を提唱しているのである。

しかし、一方では別の考え方をする研究者もいる。地域の形成というのはそんなふうにして積み上げ式に出来るものではない。他の地域との関連の結果作られるものである。他

地域の文化的・社会的影響を受けるとか、時にはもっと直接的に人の移動があって地域は作られていくのだ。そうした文化的・社会的インパクトというものは元の生態を意味のないものにするほどの大きな力を持っているから、その所を重視すべきである、とこの人達はいうのである。こういう人達は一つの地域は常に他の地域との関連によって変容させられているのだから、静止した像、固定的な性格を考えること自体が間違いである、地域とはその意味ではヴァナキュラー (vernacular) なものである、というふうにも主張していた。地域のとらえ方に固有性重視派と関連性重視派があったわけである。

地域研究そのものの中にこの二つが存在するという事は、現在の世の中の動きを反映しているわけで、それ自体が大変興味ある現象である。地域の固有性の確認が叫ばれている反面で、一方ではボーダーレス化が急速に進行している。この二つのどちらに焦点をあわせるかで、地域の見方も違ってきているわけである。

重点領域研究の初期の頃、この二派はお互いに、いささかの軽蔑をもって相手を見、どちらかという、論議を避けるような所があった。しかし、そのうち、それが少しずつ変化してきた。やっぱり、この研究のおかげで、お互いに情報交換が行われて来ているということだろうか、対話の機会も増え、最近では一種の相互了解のようなものを共有するようになってきている。

その相互了解というのはこの地球上には違った二種類の地域があるらしい、ということの了解である。一つはそこでは固有性が卓越していて、したがって固有性に着目して分析し、説明すると判り易い所である。今ひとつは関連性が卓越している所である。そのためにそこでは関連性の局面から見た方が説明し易い。

実のところをいうと固有性を強調する研究者はどちらかという東南アジアで農業を中心に研究を進めていた人達に多かった。森林帯だと焼き畑しかできないし、そうするとそこは汎神論的世界になる、などといった考え方で固有性を強調していたのである。一方、関連性を主張する人達は、例えば中東研究者の間に多かった。中東では人々は実によく移動する。商人になって生まれ故郷から何千キロメートルも離れた所に移住してしまう。巡礼で動く人もまた多い。中東というのは人の移動・混交が卓越している。だから、こんな所では、移動や関連ということを前面に出さないかぎり地域は語りえないということになるわけである。

中東を専門にする研究者はこの問題に関連して、属地的、属人的という概念を提唱して、問題をもっと解り易く整理した。彼等によると、東南アジアは属地的な価値観を持つ地域であり、中東は属人的な価値観を持つ地域ということになる。東南アジアでは価値観はその土地にくっついていて、いわゆる土地柄が出来ている。一方、中東だと価値観はそこに

いる個人にくっついていて、その個人は動きまわるのであるから、土地には価値観は結びつかない。こういうところでは、土地の性格ということになると、土地柄などというものはなく、すぐれてコスモポリタンということになる、というふうなものである。

ちなみにいうと、私自身はこうした研究成果に触発されて、私自身のいい出した「世界単位」もその内容をそれまでより一部修正し、より現実に近いものにした。その結果現在では三つの種類の「世界単位」群があると考えている。それは生態適応型の「世界単位」、ネットワーク型の「世界単位」、大文明型の「世界単位」の三つである。前の二つはそれぞれに属地型の「世界単位」、属人型の「世界単位」といってもよい。第三のものについては中華世界とインド世界を考えている。そこではそれぞれに漢文化、ヒンドゥ文化という強力な思想体系が、その地域を強く覆い、それによって地域が纏めあげられている、そういう「世界単位」であると考えている。

以上が地域研究の歩んできた道の一つの側面である。地域研究はこのように最近ではその方向も独自のものを見出したといえそうである。また、方法論的にもいささかの進展があったかに見える。しかし、まだまだ完成などというものからは程遠い。研究はほんのその入口にさしかかったばかりである。それに第一、地域研究でははたして、普通の意味での方法論が存在しうるのか否かもまだ不明なのである。少なくとも当分の間は、多くの人は自分の手法を編み出しながら進んでいく可能性が大きい。そういう状況の中では、大事なことは、研究者の一人一人が自分の研究手法とその成果である作品を恥じらうことなく皆の前に曝すことである。多くの作品を並べて合評会をし、そういうことを繰り返しながら少しずつ前進していくということである。少なくとも私は地域研究の近未来はそのようなものだと考えている。

文 献

高谷好一（1978）：水田の景観学的分類試案。農耕の技術（農耕文化研究振興会），no. 1，pp. 6-28.

高谷好一（1982）：『熱帯デルタの農業発展－メナム・デルタの研究－』創文社，392p.